

---

# 仕舞われた記憶　～おもらしからはじまる恋愛小説～

山下沙織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕舞われた記憶　くおもらしからはじまる恋愛小説く

### 【Nコード】

N7937Y

### 【作者名】

山下沙織

### 【あらすじ】

衣替えを迎え、夏の体育着となった日、寒い体育館での不安と緊張から激しい尿意を催す沙織。しかし、今日初めてブルマーを穿いて、幼なじみの涼と言葉を交わした時から、沙織は何かが違っていると感じはじめた。

《こんなこと、前にもあったような気がする・・・》  
やがて友達に尿意を見透かされ、トイレに行くタイミングを逸し、沙織はパニックになる。

そのとき響きわたった先生の怒声が、沙織の記憶を呼び覚ます。心に浮かんできたのは、幼稚園で沙織が涼といっしょにおもらししてしまったときの情景だった。衝撃的だったため幼い沙織の記憶から自然に消え去っていたその情景は、とても恥ずかしい姿を涼と見せあいながらも、不安と緊張から解放された、ふたりだけの暖かく楽しい出来事として思い返されてきた。

《涼くんはこのことを覚えてるの?》

時間のヴェールに包まれたふたり。その中で涼が話しかけてきた。幼いときからの運命的な絆を感じたふたりがその後とった行動は?

R18「びしょ濡れのブルマー」の体育館での設定をもとに、新たなテーマで書いた「スプラッシュ」シリーズの新作。初夏の高校を舞台に、幼い頃の恥ずかしくも心暖まる「おもらし」の経験が、ふたりを強い絆で結んでいくファンタジーを表現しました。

## 漏らすなんて絶対にイヤ（１）（前書き）

私の通っていた幼稚園は教育熱心なうえに規律が厳しくて、よくおもらしする子がいました。中には前を平然と押さえて、漏らしてしまう子もいたりしました。

そんな中、とくに異性がおもらしする様子には、いつも私はドキッとさせられていました。ドキッとさせられたっていうことは、逆にその子から様々なセックスアピールを感じさせられたんだということとを、私は後から気づきました。そのとき、きっと人生で初めてエロティシズムを経験した私は、その子のことが急に気になりだしたり、特別な気持ちを持ちたりしました。

おもらしという出来事は、条件さえ重なればいつ誰を襲うかわからない、そう思ったのもこの頃でした。そして、それはやがて自分にもやって来ました。でも不思議なことに、自分がおもらしたときはある時点で記憶が飛んでいて、それ以後のことを覚えていないことがありました。

きつとあまりに恥ずかしくて刺激の強い記憶は、幼い子の心から表面的には消え去るように出来ているのでしょうか。でも、それは心の奥に仕舞い込まれていただけで、私が少し大きくなってからおもらしたときに、それが思い返されることがありました。おしっこへ行けないパニック、限界を迎えて漏らす瞬間、暖くなるパンツ、脱がされる服、そういう場面場面で、心では忘れていても身体が覚えていたのです。

そして、おもらしたことが、そのときは恥ずかしさで真っ白だったはずなのに、思い出される感触は、なぜか優しく、気持ちいい

ものでした。おもらしたときの温もりや、人にやさしく世話してもらったときには、自分が不安や緊張から解き放たれて、守ってもらえている感じや、それでいて恥ずかしい失敗をして注目されている感じなど、よく分からないけれど不思議な感じがしたことをずっと覚えていました。

もし幼いときに、ひとりじゃなく、彼氏（彼女）といっしょにおもらしてしまっただとしたら、そのときふたりは互いのことをどう感じるのか、そして、その忘れていた記憶が大きくなって呼び覚まされることがあったとしたら、そして、それが恥ずかしくも楽しい記憶だったとしたら・・・

すごく素敵な恋が始まるかもしれない・・・

そんな恋のファンタジーを小説にしてみました。

## 漏らすなんて絶対にイヤ（１）

《漏らすなんて絶対にイヤ》

沙織は、エンジ色のブルマーから伸びる片ひざを曲げるようにして耐えながら涙を浮かべていた。「はやくいっついでよ」小声でそう言った友達の声も、もう沙織には聞こえなかった。

あたりがみんなの話し声でひとときわ騒がしくなったとき、急に先生  
の大きな声が響きわたった。

「うるさいぞ、みんなちゃんとしろ！！」

先生の怒鳴り声に、あたりは一瞬にして静まりかえった。

衣替えになったばかりの６月のある日、その体育館は肌寒かった。  
近く予定されている全校の球技大会のために、給食のあとの５、６  
時限目を使って、体育館では競技説明や簡単な入退場の練習などが  
行われていた。クラスごとに男子と女子それぞれ２列になって並び、  
先生や実行委員の説明を聞いていた。

学年カラーのエンジ色が袖口に入った半袖シャツ。衣替えを迎え、  
女子にとっては初めて袖を通す夏の体育着が初々しかった。そして  
シャツと揃いのエンジ色のブルマーはやや薄手のような気がしたもの  
の、弾力がありしっかりしていた。

それに両脚を入れて、ショーツを包み込むようにしてきゅっとおしりのゴムを上げたとき、今日その姿のまま男子の前に出る心もとなさ、恥ずかしさを、沙織は感じていた。

《なんだろう・・・いつもと違う》

鏡に映る姿は、中学のときに穿いた紺色のブルマーよりもVのラインがいつそう強調されている気がした。薄手のナイロンの生地が伸びるせいでそう感じるのか、それとも自分の身体が成長したからそう見えるだけなのか・・・沙織は鏡の前で身体の向きを変えながら、ブルマーから長く伸びる両脚を見てそう思った。

## 漏らすなんて絶対にイヤ（２）

沙織は、進学校でもあるこの高校に入って、中学とは全く違う学習量の多さや授業の進み方の速さに戸惑った。また、上級生から新たに下級生になったことで、上下関係や新しい学校の習慣にも慣れなければならなかった。そのため五月病になるような余裕すらないまま、あっという間に２ヶ月が過ぎた。

はじめての中間テストも何とか無事乗り越え、迎えた衣替えの６月だった。それまで精一杯全力で走ってきた沙織には、ここへきて余裕とともに漠然とした不安が感じられはじめていた。それに球技大会は沙織の得意分野でなく、いつそう不安と緊張感に苛まれていた。

《こんなこと、前にもあったような・・・》

沙織は思った。

不安と緊張の中、次第に尿意を高まらせながら、沙織はさつき教室で久しぶりに言葉を交わした涼のことを思った。男子にしては華奢な身体つきだが、昔よりもすらっと背が伸びてモデルのような体型をしていた。なのに、爽やかな白い体育着の上から見せる女の子のような甘いマスクが印象的だった。そんな彼の前で、今日のブルマーの姿は不思議と恥ずかしかった・・・初めて恥ずかしいと思った。

「やだな、こんな格好」

教室を出たとき、沙織ははじめて涼に話しかけた。涼は幼稚園のときの同級生で、当時は仲良くしていたことは覚えていたが、小中学校は学区が異なり別々だった。高校に入って再会したものの、長い

間の隔たりがふたりの気持ちをやそよそしくさせていた。しかし、ブルマーに置き替えて教室を出たとき、なぜか涼に親しげに話すことができた。

「そう？　かわいいと思うよ」

涼も、沙織の問いかけに、不思議と親しげに返事した。

「だって・・・、恥ずかしいもん」

沙織はそう言いながら、恥ずかしさとは少し違う、不思議な気持ちを感じていた。

### 漏らすなんて絶対にイヤ（3）

立ち位置の確認のため入退場の練習をしたあと、今のような並びと  
なつて1時間ほどが過ぎようとしていた。給食のあとの2時限続き、  
寒い体育館での肌を露出した格好、身体を動かさないままの説明が、  
沙織の尿意を高めていったのは確かだったが、でもそれだけじゃな  
いと、沙織は感じていた。

「沙織、トイレに行かせてもらえば？」

沙織の隣の友達が、沙織の異変に気づき耳打ちした。しかし、おし  
つこのことを気にしないよう気を紛らす努力を重ねていた沙織は、  
友達にそう声をかけられたことで自分の尿意を見透かされた思いに  
なった。そして、もう気を紛らわすことができなくなった沙織は、

どうしよう・・・ここで漏らしちゃったら・・・

と、切迫する尿意に次第にパニックに近い状態になりつつあるのを  
感じていた。身体から血の気が引いていき、脚も下半身も、ふだん  
の感覚を失いはじめていった。

《どうしてもトイレに行かなくちゃ、でないと・・・》

《これからどこかで行く機会が・・・それともこのまま・・・》

沙織は答えの出ない難問に自問自答しながら、結論が出せないまま、  
ずるずると時間の流れに飲み込まれていった。その時間が刻一刻と

沙織の尿意を高めていった。

《漏らすなんて絶対にイヤ》

沙織は、エンジ色のブルマーから伸びる片ひざを曲げるようにして耐えながら涙を浮かべていた。「はやくいっついでよ」小声でそう言った友達の声も、もう沙織には聞こえなかった。

あたりがみんなの話し声でひとときわ騒がしくなったとき、急に先生の大きな声が響きわたった。

「うるさいぞ、みんなちゃんとしろ!!」

先生の怒鳴り声に、あたりは一瞬にして静まりかえった。

## 心に仕舞われた記憶（１）

《みんな、ちゃんとしろ・・・》

先生が怒鳴ったその言葉とともに、沙織の心にある情景がよみがえろうとしていた。それはとても衝撃的な出来事だったため、当時幼かった沙織の記憶から自然にかき消され、心の奥にしまわれていたものだった。

「みんな、ちゃんとしなさい！！」

不意の先生の怒鳴り声に、いつも以上に身体がびくついたサオリだった。

”じゃああああ・・・”

その音に誰よりもびくくりしたのはサオリだった。急にパンツの中が暖かくなった。視線を落とすと、自分の短パンの下腹部から無数の水滴があふれ出していた。サオリはそれが自分のおしっこだとはまだ信じられずにいた。透明で匂いもないその水は、激しい音を立てて床に飛び散っていた。すると、

”じゃじゃじゃ・・・”

隣の列のすぐ後ろにいたりヨウの短パンからも、透明な水が時おり太ももを伝わせながら流れ落ち、床に広がっていくのが見えた。

「あゝ・・・、もらしちゃった・・・」

壇上の先生が呆れたように苦笑いした。

「はやく、おしっこ行つてらっしゃい」

ベランダの近くにいた先生が決まり文句のように言った。しかしすでにパンツを濡らしてしまっているのに、今更トイレに行つてもどうなるものではないことは、幼いサオリでも分かつていた。

それでも、リヨウは先生に促されるように、下腹部から水流を滴らせながらも、トイレのある隣の教室へと続くベランダに歩いていった。サオリもリヨウのあとをついてベランダに出た。しかしすたすたと歩いていったリヨウの歩みが突然遅くなった。サオリが視線を上げると、リヨウのおしりからさっきよりも勢いを増して太い水流が太ももを伝うのが見えた。《リヨウくんよほど我慢していたのね》とサオリは思った。

サオリもリヨウのうしろで立ち止まると、まるでそれに促されるように、自分の下腹部からおしりにかけて、さらに熱い水流が勢いよく渦巻くを感じた。その暖かさとともに、器楽の総練習を前にしてサオリを支配していた不安や緊張感が、いま一気に解けて身体ごと楽になっていくのを感じていた。

## 心に仕舞われた記憶（２）

やがてタオルなどを手籠に入れて先生がやってきた。ふたりを隣の教室の片隅に連れていき、サオリとリヨウの間に立った先生は、手籠を置いてしゃがんだ。

「ふたりとも脱いで、おしっこを拭かなくちゃね」

先生はまずサオリに背を向けると、リヨウの前にしゃがんで彼の短パンとパンツを順番に続けざまに下げているようだった。リヨウのお世話がまず先なのかの思っていたサオリだったが、次の瞬間先生が自分のほうへ向き直り、自分の短パンとショーツを一気に下げたので、サオリは思わず動揺して内股によるめいた。たぶん先生はサオリの世話を先にしてあげたかったが、男の子より先に女の子のパンツを下げてはかわいそうだという、ちょっとした配慮があったらしい。

すぐにタオルを持った先生の右手が力強く、サオリの下腹部や両脚などを拭きはじめた。

びつくりして目を伏せていたサオリだったが、おそろおそろリヨウを見た。先生の肩越しに上半身はトレーナーを着たまま下半身だけ露わにされて立っている彼がかわいらしかった。が、自分も彼からそう見えていることをすぐにサオリは悟った。

「サオリちゃん、うしろ向いて」

先生はサオリを後ろ向きにさせると、彼女の濡れたおしりや太ももを拭いた。

《いまわたし、リョウくんにおしりをみられてる・・・》

サオリは思った。さっき下腹部を見られたのも恥ずかしかったが、この頃のサオリは、自分の見えない角度からおしりを見られていることのほうが恥ずかしく感じた。

先生は、

「この上で足ばたばたして拭いて」

と言って、拭いたタオルをサオリの横に置いた。

### 心に仕舞われた記憶(3)

サオリはその上に乗って足をばたばたさせながら、ふとリヨウのほうを振り向いた。先生の新しいタオルがリヨウの下腹部を包み込むようにあてがわれ、凹凸の隅々まで丁寧に拭かれていた。そのたびにリヨウも腰を少し動かして、気持ちよさそうだった。本当はくすぐったいかもしれないが、サオリがさっき拭いてもらったときは確かに気持ちよかった。

《気持ちいいよね・・・？》

サオリがそう思いながらリヨウのほうへ向き直り、下半身裸のまま彼に目配せすると、彼もサオリを見つめ、なぜか爽やかに微笑みあった。

「わらいごとじゃないでしょ、ふたりとも。もうすぐ1年生になるっていうのに、どうするの？」

先生がそう言いながら、ふたりをさえぎるようにリヨウを後ろ向きにした。上にたくし上げられたトレーナーの裾から丸見えになっている、彼の丸く切れ上がったおしりがかわいらしかった。自分もさつき、きつとそう見られていたに違いない、そう思うと、リヨウとの間に急に親近感が湧いてきたのだった。

「ふたりとも、パンツが乾くまでこれ穿いてね」

先生は手籠から同じエンジ色のパンツを2枚取り出した。

穿いてみると、裾がVの字に切れ上がったブルマーのようなパンツだった。でもサオリは驚きはしなかった。以前から、おもらした子がこういうパンツを穿くのを見ていたからであった。誰が見ても一目でおもらしたと分かるパンツ。これを穿いている子は恥ずかしくてかわいそうに感じていたこのパンツを、いま自分が穿くことになったことに、サオリは恥ずかしさの裏で不思議とわくわくした気持ちを感じていた。

穿いてみると、毛糸でできているそのパンツは、ぴったりとやさしくサオリのおしりを包み込んだ。

《恥ずかしいけど、気持ちいい……。気持ちいいけど、恥ずかしい……。》

ふたりはすぐに楽器を持って、さっきまで並んでいた列に戻るよう促された。たくさんのおしっこを漏らしたはずの床は、分からないように綺麗に拭かれていた。

## 恥ずかしいけど不思議な気持ち（１）

ステージへの入場のため、男の子の列が先に動いた。エンジのパンツを穿いた彼のかわいらしいおしりが、サオリの目の前を通過していった。

《リヨウくんとおそろいのパンツ》

鍵盤ハーモニカを吹きながら、サオリは両手の先に見える自分のパンツに何度も視線を落とした。恥ずかしいVのラインをかもし出しているブルマーのような形をしたパンツ。そしてサオリは時おり遠くのリヨウを探した。講堂に差す柔らかな陽の光の中で、人の間から垣間見える彼のエンジのパンツを。演奏中も帰りの会するときも、サオリは自分のパンツに目をやりながら、彼のパンツを探していた。おもらしして心細いので、自分と同じ仲間を探したい、そういう気持ちもあつたかもしれないが、それだけではなかった。

おもらししたのが午後だったので、濡らしたショーツや短パンは乾いておらず、ふたりはその格好のままバスで帰ることになった。家にはその旨連絡がされていた。

いつものように、リヨウの右隣にサオリが座った。フェルト張りのざらつとしたシートの感覚が、一枚だけのパンツを通してサオリのおしりに伝ってきた。目を落とすと、座った姿勢のためか自分のパンツのVのラインがさつきより深く切れ上がって見えた。サオリは改めて今日自分がしてしまった失敗と、いまの自分の格好を恥ずかしく思った。でも隣に目をやると、リヨウのパンツも同じだったので、サオリは少しほっとした。

サオリはおもらししてから初めてリョウに話しかけた。

「おしっこ・・・、漏らしちゃったね」

「うん・・・、サオリ、どうして漏らしちゃったの？」

「先生の声に、びっくりしちゃった・・・リョウくんは？」

「僕は、サオリがおしっこ漏らしたのに、びっくりしちゃった・・・」

「そうだったの・・・ごめんね、リョウくん」

「ううん・・・」

「リョウくん、恥ずかしい？」

「恥ずかしい・・・、でも」

「でも、何？」

「なんだか不思議・・・」

「うん・・・、わたしも不思議・・・」

「僕たちただもんね」

「いっしょだもんね。なんだか、楽しいよね」

「うん楽しい」

「そうだ、またいっしょにおもらししょっか？」

「サオリがおもらししたときは、僕もいっしょに漏らす」

「私も、リョウくんが漏らしちゃったら、いっしょに漏らす」

「そしたらまた、こんなふうに戻るね」

「そうだね、そうしようね・・・」

沙織は幼稚園のときに自分がおもらししたらしいことは覚えていた。それは洗濯して乾いた自分の短パンとショーツを後日先生から渡されて持ち帰った記憶があつたからだ。でも、おもらしたときの一部始終はこのときまで覚えていなかった。それはとても恥ずかしくて衝撃的な出来事だったため、幼かった沙織の記憶からは消え、心の奥に仕舞われていた、それが今、記憶の糸を手繰り寄せるようによみがえって来たのだと沙織は思った。

## 恥ずかしいけど不思議な気持ち（2）

《涼くんはこのことを覚えてるの？》

沙織は、自分がいまだここに立っているのか分からなかった。時間のヴェールに包まれ、まわりは霞がかかったように静止していた。自分の身体は高校生に戻っていて、斜めうしろには涼が立っていた。すると涼が沙織に話しかけてきた。

「幼稚園のとき、楽しかったよね？」

「涼くん、覚えててくれたの？」

「今日の沙織のブルマー姿を見て、僕も思い出したんだ」

「最初から、なんか変な感じがしていたのは、このせいだったのね」

「沙織、おしっこしたいんでしょ？」

「うん・・・すごく、おしっこしたい」

沙織は涼の前では素直になれた。そして涼を見つめたまま思いきり自分の身体をくねらせ、もじもじさせていた。

「沙織、もう限界？」

「限界・・・」

「だめ？」

「だめ・・・涼くんはどうなの？」

「僕も、ずっと我慢してたんだ。寒かったし・・・」

「涼くんも？」

「それに、沙織がおしっこ我慢するのを見てたら、僕もすごくしなくなっちゃった・・・」

「やっぱり・・・」

「きつと、今日こうなる運命だったんだね」

「幼稚園のときから、ずっと・・・」

「このまま、しちゃう？」

「え・・・でも、もう高校生だし・・・やっぱり、恥ずかしいし」

「あのときもすごく恥ずかしかったけど、してみたら・・・楽しかったよね？」

「楽しかった・・・うん、でも何だったんだろう、あの不思議な気持ち？」

「そうだね、恥ずかしいくて、それでいて気持ちよくて、暖かくて、不思議な気持ち」

「涼くんのおしり、かわいかった」

「沙織のおしりだって」

「恥ずかしい・・・」

「恥ずかしいとこ、見せあっちゃったね」

「でも、それが恥ずかしいようで、楽しかったよね」

「そのあと、沙織のエンジのパンツ、ずっと探してた」

「私も・・・私と涼くんと、同じパンツを穿いてるんだって。それは同じ恥ずかしい経験をしたんだって」

「パンツが暖かくなって、おしっこでびしょ濡れにして、叱られて脱がされて・・・」

「もう一度、あんな時間を過ごしてみたい、って思ってた・・・あ、そう考えると、もう・・・」

「約束したでしょ。沙織がおもらししたときは、僕もいっしょに漏らすって」

「涼くん・・・ごめん、また涼くんに恥ずかしい思いさせちゃう・・・」

「恥ずかしくたって大丈夫だよ、沙織のこと、大好きだから・・・。沙織は？」

「私も、涼くんのこと、大好き！」

沙織がそう叫んだのと同時に、まるで意識が遠のくようにふたりを包むヴェールが解けていった。体育館のキャットウォークから暖かな日の光が差し込んでいた。

《うるさいぞ、みんなちゃんとしろ！！》

先生の怒鳴り声が、沙織の心に大きく響きわたった。沙織は身体に電気が走るように身体をびくつかせた。

## エピソード〈恋のプロローグ（1）〉

激しい音がした。球技大会の総練習を前にして、沙織を支配していた不安や緊張感が、いまパンツの中の暖かさとともに一気に解けて身体ごと楽になっていくのを感じていた。沙織が視線を落とすと、ショーツのなかにあふれた暖かい水が、おろしたてのブルマーの撥水生地を突き破り、エンジ色をした下腹部の表面から無数の水滴となって吹き出していた。透明で匂いもないその水は、そのまま床に落ちて激しく飛び散っていった。でも、

《私、おしっこを漏らしてる》

今度はちゃんと沙織も分かっていた。

続いて音のした斜めうしろを沙織が振り返ると、涼の下腹部をぴつたりと包むエンジ色をした短パンのそこかしこから水滴を吹き出させながら、そこから伸びるきれいな両脚を、透明な水がいくつかの筋となって伝い、床に落ちて広がっていく様子が見えた。涼の目は伏し目がちに、しかし時おりきらきらと光らせながら沙織のほうを見上げていた。

沙織は安心してそっと前へ向き直ると、下腹部の熱い水流がさらに勢いよく渦巻くのを感じていた。それは水を弾こうとするブルマーの生地に阻まれながら、沙織の下腹部やおしりを暖かくくすぐった。

《あゝ・・・、もらしちゃった・・・》

《はやく、おしっこ行ってらっしゃい》

幼稚園の先生のそんな声が聞こえたような気がした。でもその声は暖かく、笑顔で自分たちを見守ってくれているように感じた。

## エピソード―恋のプロローグ(2)

周囲がざわめきながら、広がりゆく水たまりを避けるようにふたりに離れていった。沙織と涼のまわりにふたたび人のヴェールがつかれた。涼が歩きだし、渡り廊下へ続く階段を降りていくあとを、沙織もついていった。周囲のざわめきが遠のいていった。涼のおしりをぴったりと包むエンジの短パンは、下の部分が黒く濡れて光り、ショーツの線が少し浮き出していた。

外のコンクリートの上で涼が立ち止まると、彼は安心したのかふたたび水流を太ももに伝わせていた。沙織も涼の隣で立ち止まると、安心した。そして、まだ出きついていなかったおしっこがまたあふれてきて沙織の下腹部を熱くした。

さっきまで無数の水滴を吹き出させていた沙織のブルマーは、いつしかすっかり水を吸って黒く濡れ光り、あふれる水滴もいくつかの筋となって、涼と同じように沙織のおしりから流れ落ちていった。それは時おり太ももをうねるように伝って、沙織の両脚と上履きを濡らしていった。沙織は涼よりもたくさんのおしっこを我慢していたらしく、彼女の足もとは少し大きな水のあとができた。

《保健室の青い棚に、パンツとタオルが用意してあるから、ふたりとも行って着替えなさい。制服はあとで持って行ってあげるから・  
・》

呼びかける先生の声を聞き、ふたりは手をつないで保健室へ続く廊下を歩いていった。

「ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ・・・」

歩きたび、水を吸ったふたりの上履きがリズムカルに奏でる音が可笑しくて、ふたりは顔を合わせて笑った。涼も沙織も、互いの顔が頬を赤らめて艶のある表情をしているのに気づいた。

## エピソード〈恋のプロローグ（終）〉

誰もいない保健室で、ふたりはベッドのある部屋へ入ると、薄緑のカーテンを閉じた。そこは周囲から守られている感じがして、日差しがほどよく通過して明るかった。

沙織は少し離れて涼と斜めに向かい合った。涼の短パンが上のほうまでぐつしよりと濡れている様子が沙織の目に飛び込んだ。ふと沙織が自分のブルマーに目をやると、涼ほどに濡れは広がっていないものの、濡れた下腹部が黒ずんでくつきりと浮かんでいた。沙織は思わずおしりに手をやると、おしりのかなり上の方まで濡れているのに気づいた。涼も沙織を見て、自分のおしりを確かめた。下半身びしょ濡れのふたりは、そのまま照れるように笑った。

「ふたりとも、脱いで、おしっこ・・・拭かなくちゃね」

「ふたりとも、ね」

ふたりは、それぞれまず濡れた上履きと靴下を脱いで、裸足になった。そしてふたりの動きが止まった。

「うん・・・」

「さあ・・・」

「先に脱いで・・・」

「どっちから・・・」

「あのかきは・・・涼くんからだったでしょ」

「でも、ほら、先に漏らしたのは沙織だし」

「そっか・・・」

「いっしょに脱いじゃおうか」

「そうしようか・・・」

沙織はブルマーに手をかけて、少しためらった。そのとき沙織の心に、幼稚園のときに自分のパンツを脱がせようとする先生の姿が浮かんできた。そして、まるでその先生の手が一気に脱がせるように、沙織はブルマーとショーツと一緒に下げた。それらを両足から外して持ち上げてみるとブルマーの内側のショーツはぐつしりと濡れ、その手前で頼りなさそうに露わになっている自分の下腹部は、濡れた黒い毛先が陽の光に照らされてきらきらと光っていた。

恥ずかしさに伏し目がちだった沙織が、勇気をだしてそつと見上げると、結び紐を解いてひざ上まで下げられていた涼の短パンの上に、彼の真白いショーツがぐつしりと濡れて透けているのが見えた。そして沙織が息を呑むまもなく、涼のショーツが下げられた。涼は沙織の前で気持ちが高ぶっているようだった。あのかきのように可愛らしくも、たくましい涼の姿がそこにあった。

涼が沙織を見つめる視線が、自分の下腹部に落ちるのを感じ、沙織は思わず動揺して内股によるめいた。

「沙織、大人になったね」

「涼くんも・・・」

「沙織のおしり、かわいい」

「涼くんだって」

「楽しい？」

「楽しいよね」

「ふたりとも、笑い事じゃないよ。もう高校生になったのに、これからどうするの？」

ふたりは先生の声色を真似して笑いながら、代わる代わる互いの濡れたところをタオルで丁寧に拭きあった。涼も沙織も、互いの手の暖かみを感じた。そして素敵な恋が始まろうとしていた。

（終わり）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7937y/>

---

仕舞われた記憶 ～おもしろからはじまる恋愛小説～

2011年11月25日23時19分発行